

昭和石油平沢製油所の開業から戦時を経て閉鎖まで —平沢製油所物語—

2020年6月修正

1. 平沢製油所の開業から閉鎖までの歴史

平沢製油所は秋田県に産出される国産原油を処理する製油所として、秋田県由利郡平沢町平沢字新町3番地の地に昭和6年に操業を開始し、昭和43年に閉鎖になるまで戦前、戦中、戦後の37年間、日本の石油産業を支えてきた製油所です。その歴史（アーカイブ）をまとめました。

秋田の院内油田発見からの平沢製油所閉鎖までの足取りを下表に示します。

明治5年(1872)	米国の地質学者 ベンジャミン・ライマン氏が秋田県の鉱物資源調査を開始
大正11年(1922)	大日本石油鉱業（現在の帝国国際資源開発）が試掘を開始
大正12年(1923)	同社、第1号井が、深度110～425mの範囲で約5kLの採油に成功
昭和6年10月	新津恒吉、秋田県平沢に製油所完成 早山石油、川崎扇町地区に川崎製油所完成
昭和7年11月	旭石油、秋田県院内で試掘に成功(院内・小国両油田開発の端を開く) 大阪市・田中源太郎と提携し、GTC 機械油を製油する
昭和8年	需要激増し平沢工場の全能力をもってしても応じきれない状況
昭和14年1月	新津石油、資本金1000万円の株式会社に改組
昭和17年8月	早山石油・新津石油・旭石油3社合併し、昭和石油(株)を設立
昭和19年4月	帝国石油など422社、軍需会社に指定(第2次)
昭和20年3～8月	米軍空襲による各製油所被爆 日石東京(3)、興亜麻里布、大協四日市(5)、丸善大阪(6)、東燃和歌山、丸善下津、三菱川崎、 昭石川崎 、日石鶴見(7)、 日石秋田 ・日石関西・日石下松(8)
昭和21年1月	GHQ、原油輸入禁止の覚書を交付 GHQ、石油配給統制(株)を輸入・国産両石油製品の一元的取扱機関に指定
昭和22年3月	平沢製油所にパジャー式減圧蒸留装置(500B/D)を彦島(下関)より移転完成
昭和24年9月	平沢製油所 常圧蒸留装置・新設完成(3,000B/D)
昭和25年1月	太平洋岸各製油所、操業再開。他社に先がけて昭和石油川崎製油所の操業再開(1月15日にボルネオ島セリア原油80,000Bを積んだ輸入第1船ミルザ号が川崎製油所に接岸)
昭和32年11月	昭和四日市石油(株)設立
昭和33年5月	昭和四日市石油四日市製油所が完成(四日市第二海軍燃料廠跡)

昭和 38 年 10 月	新潟製油所に日本初の集中合理化装置完成（同時に新潟沖に日本初の SBM：シェル式単点係留ブイ完成）
昭和 39 年 6 月	新潟地震で新潟製油所被災、昭和 4 1 年 5 月再建
昭和 43 年 3 月	昭和石油平沢製油所を閉鎖

*太字は平沢製油所に関連する項目

2. 院内油田の開発経過 →添付の院内油田（1）院内油田（2）資料参照

にかほ市院内の東側には、字名を「臭津（くそうず）：臭いのする湿地の意味」という丘陵地帯があり、古くから露頭湧出していた。日本政府の招聘を受けた米国の地質学者ベンジャミン・ライマン氏が各地域で鉱物資源の調査を行っていたが、院内村の露頭調査した結果、極めて良質な油層を発見することができた。

大正 11 年（1922 年）大日本石油鉱業（現在の帝国国際資源開発）が試掘し翌 12 年（1923 年）には、第 1 号井が深度 110～425m の範囲で約 5 k L の採油に成功し、大正 14 年（1925 年）には日本石油、旭石油などが相次いで院内油田の開発を行った。

昭和 6 年（1931 年）には、新津石油が平沢製油所を建設し、昭和 15 年（1940 年）頃には年産 11 万 k L に達し、油田開発は最盛期を迎えた。特に院内原油は希少な「**無蠟重質原油の性状**」を有したために、優れた潤滑油を生産でき、需要に追いつかない状況が続いた。特に日立製作所へタンク車で納入した「**高圧絶縁油**」はその代表的な例である。

しかし、戦後徐々に産油量が減少し、外国原油の輸入が増加し、太平洋側製油所も大規模化されるにつれ、帝国石油院内鉱業所、昭和石油平沢製油所共に、閉鎖するに至った。

3. 平沢製油所の開業～活動時期～閉鎖まで

3.1 平沢製油所は、主として大正後期～昭和初期に資源開発された院内原油を精製するために当時の新津石油によって建設された。

3.2 昭和石油（株）に替った直後に「太平洋戦争」が勃発し、エネルギーの需要が急増したが、外国産油の輸入は極減し、国産石油製品に

対する期待が高まる中、新潟製油所と共に、石油製品の供給及び増産に励んだ。

- 3.3 戦後も石油会社の太平洋側の多くの製油所が爆撃・破壊され、昭和25年のGHQによる太平洋岸製油所の操業再開の許可が出て、再開するまで、平沢製油所は独自に供給を続けました。しかし、日本海側の多くの油田は産油量が減少し、枯渇へ向かいました。
- 3.4 平沢製油所の処理量も精製能力 3,000 B/D に対し、原油入荷量は 500 B/D までも激減し、スケールメリットによる製品原価の低減要求に対し対抗不可能な状態となりました。
- 3.5 廉価な外国産原油を巨大タンカーによる輸入と大規模製油所と各種の化学処理・高品質化への推移が、石油業界に要求され、Q（品質）、C（価格）、D（輸配送）等の改善が進みました。
- 3.6 平沢製油所は、①初期の国産原油の処理製油所としての役目、②戦前の液体燃料（航空機・自動車など）の需要への対応、③戦時の重要なエネルギーと軍への潤滑油の供給、④戦後の太平洋側製油所再稼働までの繋ぎなどの役割を充分、果たしてきたと考えられます。

4. 戦時の状況

- 4.1 8月14日と日本石油秋田製油所への空爆：

終戦の前日の昭和20（1945）年8月14日午後10時27分ごろ、秋田市土崎港地区にあった日本石油秋田製油所を標的にB29による爆撃が始まった。この爆撃は翌15日の午前2時39分まで3時12分間も続いた。この爆撃で日石製油所は全滅したほか、建物の全焼104、半焼6、全壊12、死者は民間人が93人、軍人160人前後と推定、また傷者も多数に及び甚大な損害を被った。この空襲は**太平洋戦争最後の空襲**であり、また、**秋田県で唯一の大規模空襲**であった。

土崎では毎年、秋田市戦没者追悼式・平和祈念式典が執り行われ、土崎空襲の犠牲者を悼み平和を祈念しています。

4.2 平沢製油所はどうであったか：

昭和 20 年 8 月に入ってから太平洋側にある日本製鐵釜石製鉄所に対する艦砲射撃の轟音と地響きが日本海側まで伝わり、太平洋側のほぼ全ての製油所も爆撃を受けており、日本海側の平沢製油所も近々爆撃を受けるのではと予測し心配していました。

そして、8 月 14 日 10 時頃からグラマン 11 機が秋田市方面から山形県に間を数回往復し偵察していました。午後には、金浦国民学校の校庭で、本土上陸に備えて竹槍訓練をしていた高等小学校の一団が見つかり、機銃掃射を受け、一人が左腕に被弾しました。そんなこともあり、明日は平沢製油所が爆撃を受けるのではと予想し、殆どの方は家族や町内単位で防空壕に避難しました。

真夜中、遠く離れた秋田市の日本石油秋田製油所に対する B 29 による爆弾投下の轟音と真赤に燃える炎が見え、明日は我が身かと覚悟をしていました。翌 15 日は艦砲射撃の轟音と真赤に燃える炎が見え、生きた気持ちがありませんでした。翌 15 日は家族全員で朝から先祖の墓参りや神社に参拝し、本当に「お別れの気持ち」でした。午後になってから、天皇陛下の「玉音放送」があり、敗戦を知ることとなりました。

4.3 後日談：

後で聞くと、平沢製油所所員全員が、爆撃による火災の消火に備え、特設消防隊を始め、製油所の裏山に避難し、無事を祈り待機していたとのことでした。夏の親睦会では毎回必ず、この話が出て、お亡くなりになられた方々の霊を悼み、黙祷を捧げることにしています。

参考資料：秋田大学鉱山学部資料（中田真一教授、大場司教授）

日本のシェル 100 年のあゆみ

燃料業界誌

院内油田(1)



現存する唯一の「原油汲み上げポンプと動力機」

昭和40年代以前のかほ市巾山丘陵では、夜には星よりも明るく灯が点り、眩い夜景が広がっていました。それは当時稼働していた院内油田の灯でした。院内油田は大正11年に上小国集落付近から開発が始まり、その後は北側や桂坂集落に開発が広がりました。しかし平成7年には閉山となり、現在は一部が近代化産業遺産として保存されています。

かつて秋田県は国内有数の油田地帯を抱えていました。明治6年の秋田市旭川油田の開発の後、明治後期～昭和初期を中心に多くの油田が開発されました。黒川、豊川、八森、由利、八橋、院内、桂坂、小滝が当時の油田として挙げられ、中でも院内油田は秋田市の八橋油田と並ぶ大規模な油田であり、日産量が日本最大だったこともあります。昭和30年代まで県内の多くの油田は稼働していましたが、その頃から急速に減退し、多くの油田は閉山しました。

県内にはわずかながら現在でも採油している油田もあり、秋田市では住宅地に隣接する油田を見ることができます。一見するとかつての院内油田とはずいぶん違って見えます。ぜひ産業遺産の院内油田跡と比べてみてください。

(秋田大学大学院 国際資源学研究科 資源地球科学専攻長 教授 大場司氏・・にかほ市平沢出身)

院内油田(2)

院内油田は、かつては国内有数の産油量を誇った油田です。大正11年、大日本石油鉱業(株)が試掘を始めたのを皮切りに、急速な開発が進むことになりました。周辺には、院内・桂坂・小滝・上浜の四油田がありましたが、その中でも、最大の採油量でした。昭和10年には採油量も年

産11万3千KLに達し、油田開発は最盛期を迎えましたが、産油量が徐々に減少し、平成7年に閉山となりました。現地に残された設備跡がかつての面影を現在に伝えています。

院内油田は、1878年(明治11年)米国の地質学博士ベンジャミン・ライマンによって発見され、1923年(大正12年)に採油開始。1931年(昭和6年)、仁賀保に平沢製油所を建設。1945年(昭和20年)には、年産11万キロリットルに達し最盛期を向かえました。以降1995年(平成7年)に産油量が減少し閉山するまで、約70年間日本の産業を支えてきた100基以上が稼働していた国内最大規模の油田でした。

現在は、採取したやぐら、ポンピングタワー棟(院内油田の採油方式)が当時のまま残されており、貴重な産業遺産となっています。



最盛期の「院内油田」:採油やぐらが林立していた

秋田県の日本海岸にある油田。1933年試掘に成功し日本最大の油田となった。雄物(おも)川河口付近の八橋(やばせ)をはじめ、若美町(現・男鹿市)の申川(さるかわ)、仁賀保(にかほ)町(現・にかほ市)の院内などに油田があり、海底油田の開発も進んでいる。1935年産油量約18万klで、以後新潟油田をしのいだ。1959年の29万klを最高として八橋油田の産油量は減少し、代わって男鹿半島北部の申川油田が有力となった。土崎、船川、平沢などで精油される。1965年の秋田・男鹿両市、および周辺の新産業都市指定に際し工業的基盤となった。